

The background features a soft, painterly illustration of a landscape. The upper half shows rolling green hills or mountains under a pale, hazy sky. The lower half depicts a calm body of water, likely a lake, with gentle ripples and a light blue-green hue. The overall style is serene and naturalistic.

湖山の



かすみがうら市

2025

1

飛澤 龍神 氏



昭和 25 年 (1950) 石岡市生まれ、市内在住の画家である。昭和 40 年 (1965) 茨城県立石岡第一高等学校在学中、日展会友山口武氏に洋画の指導を受ける。昭和 43 年 (1968) 茨城県立石岡第一高等学校卒業。昭和 47 年 (1972) 油彩画を朝日展初出品、以降 53 年 (1978) まで毎年出品。昭和 55 年 (1980) 日本画に転向。新興展初出品。昭和 61 年 (1986) 上野の森絵画大賞展に入選、秋季新興展にて日本美術協会賞を受賞。平成 4 年 (1992) NTT を退社し画業に専念する。新興美術院参与就任。平成 8 年 (1996) 新興美術院理事就任。平成 10 年 (1998) 新興展文部大臣奨励賞を受賞。平成 11 年 (1999) 雅号を龍神とする。日本画の東洋的、日本的な美しさに魅了され、描くことの中に美を追求している。

・かすみがうら市は作品の制作にどのような影響を与えているのか教えてください。

私は石岡市で生まれましたが、霞ヶ浦沿岸で育ちました。ふるさととは私にとって、親のような存在であり、自己形成の基盤となった大切な場所です。この土地で育まれた環境や経験が、今の私を形作ってくれたと感じています。

その人の人柄というのはその土地の環境や風土によって形成されると思います。同じように、私の美術や「日本的な美」の感覚も、この生まれ育った環境からしか生まれ得ないものだと考えています。

特に、この地域の自然界の変化には深い魅力があります。日本で一番平らで太古より人の営みがあるところですので、環境が人を作ると言われますが、ここにいると、この土地ならではの自然や移ろいに感銘を受け、そこから作品が生まれているのを強く実感します。

・これまでどのような人生を歩み、現在の作風にたどり着いたのか教えてください。

高校時代に影響を受けた美術の先生は、霞ヶ浦沿岸の風景を描いていました。

私も先生にならい、油絵で霞ヶ浦沿岸の風景画などを描いていましたが、その頃から次第に日本画の魅力に惹かれるようになりました。そして、29 歳の時に洋画から日本画へと転向し、30 歳からは新興展に作品を出品するようになりました。

自分がどのような絵の世界を作り上げていきたいのかについて、油絵を描いている時は特に意識せず、写生的に描いていました。しかし、日本画へ転向してからは、伝統的で日本的な美の世界を追求しようという意欲が強くなりました。その思いは今も変わらず、自分の目標として持ち続けています。

また、霞ヶ浦沿岸や自分の生まれ育った環境、この地域の題素材を活かして作品を描きたいと考えました。京都の寺院や庭園など、現地で見た際の美的な感動は圧巻ですが、自分の生まれ育った環境にはないものを創作の題材とすることには、感覚的な違和感がありました。先ほど「日本的な美」と表現しましたが、京都に見られるような伝統的な美とは異なり、私はかすみがうら市の環境や風土、ふるさとを大切に作る日本人特有の美しい気持ちの持ちようを反映させた作品を描いています。

・作品制作時にどのような技法や過程に重きを置いているのか教えてください。

私の作品には、特別に難解な技法は一切用いていません。ただ、自分らしい作風という点で言えば、一度盤面を真っ黒に塗りつぶしてから絵を描くという手法が、私独自のスタイルだと考えています。

しかし、私は奇抜さや一時的な流行を狙って作品を制作しているわけではありません。過度な誇張を避けつつ、100 年、200 年先の未来でも多くの人々の心に残る、わかりやすく王道な絵を描くことを大切にしています。

私にとってスケッチは、皆さんが仕事の中でメモを取る行為と同じような意味を持っています。展覧会などで色紙にリクエストされた題材を即興で描く際には、頭の中のイメージをそのまま形にする必要があります。そのためには、日頃から多くの風景や動植物をスケッチし、イメージを蓄積

することが大切だと思っています。これにより、求められた題材に応じて、多くの引き出しから最適なものを素早く取り出し、描くことができるのです。ですから、スケッチはすべての作品を描くのに必要なことです。



• 作品を通して、どのようなメッセージを伝えたいと考えているか教えてください。

「美しい」「綺麗だ」と感じた瞬間の感動を、東洋的・日本的な美として盤面に美しく描きたいという思いで制作しています。

特に霞ヶ浦を描く際には、その美しさを再現することを大切にしています。それは、霞ヶ浦が美しくあり続けてほしいと願っているからです。

人が、美しい花が咲く場所で暮らしたり、自然の恵みを享受し、心穏やかに過ごしたりすることには、かけがえのない幸福があると考えています。

私の作品は単なる美しさだけでなく、調和や自然の摂理を感じられるものを描いていると言えます。それは「美しい自然は大切である」という願いです。その気持ちを作品に込めて描いています。



• 創作に使用している素材や道具について教えてください。

私は創作において、伝統的な日本画の絵の具、岩絵の具、水干絵の具、墨、金、銀を用いています。

• これまでに印象に残った展覧会などがありますか。

フランスのコールマルという町で開催した個展は、特に印象に残っています。

ただし、強く記憶に残っているのは個展そのものというよりも、その時期に周囲で起こった出来事を含め、私にとって大きな転機があったからです。

フランスでの個展の約1年数カ月前、妻（当時は婚約者）が事故に遭い、生死の境を彷徨いました。半月ほどして一命を取り留めたものの、下半身不随となり、医師からは「二度と歩くことはできない」と告げられました。絶望感と悲壮感の中、展覧会への出品作品を制作するため筆をとったとき、私は画面全体を漆黒に塗りつぶし、その上にススキを描きました。これが『黒い背景』の始まりです。その漆黒の背景は、まるで私自身の心と共鳴するかのように、作品の中に自然と溶け込んでいきました。

そんな折、シラク大統領のサインが入った書類が届き、フランスでの個展開催が決まりました。制作活動と妻のリハビリのための病院通いが続く中、喜怒哀楽が目まぐるしく押し寄せ、私はただ夢中で日々を過ごしていました。

『黒い背景』は、当時新たな挑戦であったと同時に、絵画、日本画と向き合い続けた20年余りの中でたどり着いた、一つの到達点だったのだと思います。



• 今後、画家としての目標や計画をお教えてください。

アメリカ・ニューヨークで開催された「STEPPING INTO A WORLD 3」展は、私にとって特別な体験となりました。

これまで画家として歩みを進める中で、自分の立ち位置や目標が定まり、画家人生は順調でした。しかし、その一方で変化や刺激が少なくなっていると感じていたとき、妻の勧めもあり、ニューヨークでの出展を決意しました。

今後は、これまで通り日本での活動を継続しながら、ニューヨークでの個展のような新たな挑戦にも積極的に取り組んでいきたいと考えています。

• 今後かすみがうら市に何を望んでいるのか教えてください。

これは、かすみがうら市や芸術分野に限った話ではありませんが、現在、最も深刻な問題の一つとして「担い手の不足」があると考えています。

そこで、市内に点在する画家や書道家などの芸術家を、市が講師として招き、講座を開いてほしいと思います。また、文化協会など地域で活動する文化団体も講師として招き、公民館などを活用した講座の開講から、発表会や展示会の開催までを一貫してトータルコーディネートしてもらいたいと考えています。もちろん、芸術の価値や芸術家の尊厳を守るために、かすみがうら市として、文化・芸術の振興を後押ししてほしいと願っています。





間島 秀徳 氏

昭和 35 年 (1960) 取手市生まれ、市内在住の画家である。昭和 59 年 (1984) 東京芸術大学美術学部絵画科日本画専攻を卒業。昭和 61 年 (1986) 東京芸術大学大学院美術研究科修士課程を修了。平成 7 年 (1995)、かすみがうら市にアトリエを構え、平成 12 年 (2000) に文化庁在外研修員として、フィラデルフィア(ペンシルバニア大学)、ニューヨークに滞在。平成 27 年(2015) から令和 3 年 (2021) まで信州大教授、同年 (2021) から武蔵野美術大学で教授を務めている。

水をテーマに制作し、1980 年代後半から個展を中心に活動を続け、2000 年代以降は、ギリシア語で「運動」と「変化」を意味する「キネシス」を作品のタイトルとしている。

●日本画家としてキャリアを歩むことになったきっかけは何ですか？

私がこの道を志したのは、小学生時代に遡ります。50～60 年前、取手町（現在の取手市）の利根川沿いで育ち、父が教員で絵に関心を持っていた影響で、自然と絵に触れる機会が多くありました。上野の美術館に連れて行ってもらったことも大きな経験でした。これらの体験を通じて、絵に対する好奇心が芽生え、自分の中に新たな世界が広がっていくのを感じましたが、当時は外で遊ぶ方が好きでした。その後、千葉県や茨城県周辺への引っ越しや進学を経て、絵が得意だと自覚し、高校3年の終盤に美大進学を決意。倍率20～30 倍の時代でしたが、浪人を経て進学しました。

大学では登山部に入り、日本アルプスや厳冬の山に挑みました。現在も登山や素潜りを楽しみ、「自分の体ごと体験する＝自然の中に入り込む」感覚を大切にしており、この感覚は私の制作活動にも活かされています。

特に、タイトル『キネシス』に込められた作品群は、そういった体験や実感を基にし、数々の試行錯誤を経て完成させたもの

です。その代表例として、水を素材とした作品や、水そのものを使って表現する独自の方法を生み出しました。これらの作品は、私が自然との対話を通じて得た感覚を形にしたものです。

●かすみがうら市は作品の制作にどのような影響を与えているのか教えてください。

かすみがうら市では、約 25 年前からアトリエで制作を行っています。周辺の風景は昔のままで、とても静かな環境の中、落ち着いて創作活動が続けることができています。

アトリエ兼住居は、同級生の建築家に依頼し、防犯面を考慮しつつ、経費を抑え、生活スタイルに合った形で設計・建築してもらいました。多くのこだわりがあったため、細かい部分については「住みながら工夫すれば良いのでは」とのアドバイスをを受けつつ完成させた結果、既製の建売住宅を購入するという発想には至りませんでした。

アトリエは霞ヶ浦沿いの独特な地形に位置しており、強風の日には建物が揺れることや、雨漏りが発生することもあります。これらは、建築家も考慮しきれなかった点かもしれません。

そんなアトリエですが、東日本大震災（2011 年 3 月 11 日）が発生した際は東京にいたため、地震直後は倒壊を覚悟しました。交通網が麻痺していたため遠回りして戻りましたが、予想に反して大きな被害は受けていませんでした。

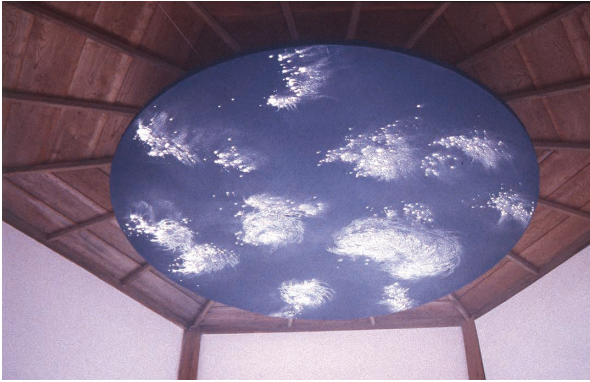
かすみがうら市から受けた影響とは少し異なりますが、このような自然災害の経験や、作品に「水」をテーマとして取り入れていることもあり、自然の美しい一面や人間にとって大切なものだけでなく、突然猛威を振るう現実的な側面も作品を通じて表現したいと考えるようになりました。

●画家として生きるための芸術観と哲学について教えてください。

日本画の始まりについて、皆さんはどのようなイメージをお持ちでしょうか。水墨画や浮世絵など日本の伝統に根ざしたものと考える方もいるでしょう。私は、日本画の本質は「材料」にあると考えています。膠を混ぜた顔料は、古くから障壁画や日本美術院の展覧会で使われ、日本画の本質を支えています。

私なりの解釈では、これら『材料』を通じた制作を総称して「原理」と呼びたいと思っています。この「原理」とは、単に美しく、あるいは巧みに描くことだけを目的とせず、素材や材料、手法と向き合い、それらを通して表現する姿勢を指します。私は、この「原理」なしには芸術に真摯に関わるこ





とはできないと考えています。そして、私が考える「原理」では、芸術は誰にでも開かれた入口を持つべきものだと考えています。

話は日本画に戻りますが、日本画は歴史的に見てもたくさん解釈があります。

日本画という言葉は明治時代に生まれたと言われており、ある外国人が日本の作品を見て、油彩画（西洋画）に対して作品を説明するために日本画となったと言われていました。それ以前にも日本には絵画や絵巻物がありましたが、日本画とは厳密には異なります。今では世界的に高く評価されている葛飾北斎の作品も、当時の人気者や有名な歌舞伎役者など、大衆文化と深く結びついていました。展覧会が普及する以前、日本の芸術は寺院など大衆の身近な場所にありました。こうした流れの中で日本画は発展し、伝統と形式が整えられ、現代へと受け継がれています。

●作品制作時にどのような技法や手順、準備を行っているか教えてください。

岩絵具や、大量の水を使用して作品を作成しています。

簡単に説明すると、和紙を張ったパネルを寝かせ、その上から大量の水を流し、水の流れを利用するように絵具を垂らし、それを繰り返して、自然現象の力を借りながら自分の体の感覚と共に描く特殊な技法です。

●作品を通して、どのようなメッセージを伝えたいと考えているか教えてください。

私が制作している作品は、大きなものが多いため、携帯電話などの画面越しでは質感や迫力が伝わりにくく感じています。しかし、そうした特性に対する反骨心から、意図して大きい作品を制作していると言ってもいいでしょう。

近年、携帯電話などの小さい画面の中でも直感的に理解



されやすい「見栄えの良い小さな絵画」などの方が、現代的な『映える』という概念からも求められる傾向にあり評価されているかと思います。しかし、それらの作品は受け手に「なんとなく分かった気がする」

感覚を与え、断片的で表面的な印象しか残すことが出来ないと考えています。その反面、大きな作品は小さな作品と比較して見づらく理解されにくいですが、現地で直接見たときの受け手に与える衝撃は小さな作品とは比べ物にならない魅力があります。

私が目指すのは、分かりやすさよりも、見る人の感覚を呼び起こし、自由に感じてもらえるような作品を作ることです。それは、特別な知識がなくても何かを感じ取れる作品であり、全く新しい視点を与えられるものです。たまたま私の作品を見てくれた方が「よかった」という無難な感想を抱く作品よりも、「すごく感じるものがあった」という感想をいただける作品を制作できたときに、創作の意義を感じます。

●作品に対するテーマについて教えてください。

私の芸術観を支えるテーマとして、『天地無常』があります。この言葉は、私の作品のタイトルにもなっている『キネシス』と深く結びついており、「変化し続けるもの」という語源的な意味を持っています。

『天地無情』は、「同じ日は二度とこない」という意味を含むと同時に、仏教的な意味合いも孕んでいます。この概念は、自然界や人間を含めたすべてに普遍的に起こる日々の変化を表しており、私たちがその変化の中でどのように生きるかを問うものです。

何が起こるか分からない一瞬一瞬を大切にすること、その刹那的な時間や状況をどのように捉え、作品を通じて表現するかという点が、私の創作活動の根幹を成すテーマとなっています。

●今後かすみがうら市とどのように関わっていきたいとお考えですか。

「新しいものを作るよりも、古いものを大切にしてほしい」という思いを強く持っています。歴史的な建造物や場所には特別な価値があり、それを活用することで新たな創造性が生まれると感じています。

以前、二条城で行った展示では、展示会場として設計された建物ではないため、全体的に薄暗い環境でした。しかし、それがあって一つの空間全体を作品として感じさせ、非常に満足のいく仕上がりとなりました。同様に、霞ヶ浦周辺では、例えば椎名家住宅のような歴史的な建物を展示の場として活用するのも面白いのではないかと思います。

過去に歴史博物館内で展示を行ったこともありますが、個人的には展示会場よりも古民家などの住宅の方が作品と調和しやすいと感じています。さらに、霞ヶ浦ならではの雰囲気や特色を引き出す展示も魅力的です。例えば、展示と同時にコンテンポラリー・ダンスのパフォーマンスを行うようなイベントがあれば、非常に興味深いものになるでしょう。

また、作品を展示ケース越しではなく、観客が間近で直接見ることができる環境が理想的です。屋外展示も魅力的ですが、長期間の場合は作品の安全性や天候の影響を考慮する必要があります。そのため、短期間で行う展示が私の作品には適していると思います。同じ作品でも、会場や展示方法を変えることで雰囲気が大きく変化します。この特性を生かしながら、市民の方のみならず、より多くの人に作品を楽しんでもらいたいと考えています。



都賀 俊雄 氏

昭和 14 年 (1939) かすみがうら市生まれ、市内在住の陶芸家である。茨城県立石岡第一高等学校卒業後、茨城大学美術科へ進学し、巻島友治教授のもとで油絵等の技法を学ぶ。昭和 38 年 (1963) 大学卒業。旧桜村(現つくば市)の桜中学校で教鞭をとり、石岡中学校へ転属するが、転属後 1 年で辞職。昭和 50 年 (1975) 旧桜村中央公民館で陶芸教室を開始。旧千代田村 (現かすみがうら市)、石岡市、土浦市で陶芸教室の講師として活躍。昭和 63 年 (1988) 中佐谷に自宅兼工房を構え作陶に没頭。平成 12 年 (2000) 「真空窯結晶化」に成功。平成 17 年 (2005) カリフォルニア州アーバイン市で「つくば焼」展覧会を開催。平成 23 年 (2011) つくば市玉取に工房を新設。令和 5 年 (2023) かすみがうら市を代表する陶芸家として、茨城県知事へ作品を贈呈。高い不変性を持ち、自身にしか作れない唯一無二の焼き物を作ることを目指し、作陶を続けている。

●現在の手法を用いた陶芸に繋がるきっかけについて教えてください。

私は幼少期からものづくりに強い興味を持っていました。小学校入学前には、軍隊経験者から譲り受けた手回し発電機で遊びながら、それを基にモーターを作ったり、ラジオを分解したりしていました。こうした遊びを通じて、電気や科学に対する関心が芽生えたのです。

特に電気には強い興味を持っていましたが、当時、電波の仕組みを理解するのは非常に難解でした。それでも、小学生の頃には、花火の発火によって電波が発生することを理解していました。この興味の背景には、教材を販売していた軍隊経験者の影響があります。その方が東京から帰省するたびに、鉱石ラジオやモーターを見せてくれたり、一緒に遊んでくれたりしたことが、大きな刺激となりました。

小学校に入学してからは、発電機や乾電池に魅了され、ラジオのような静的なものよりも、動くものに惹かれるようにな

り、モーター作りに没頭しました。2 極モーターは比較的簡単に作れましたが、3 極モーターの製作には苦勞しました。2 極モーターは鉄の空き缶やトタン板をハサミで切って作成していましたが、その際に使用していたハサミは、果樹 (梨や柿) を栽培していた家にあったものを流用していました。

冬になると、父と一緒に果樹栽培のため山の中腹まで行き、炭窯

で遊んでいました。その場所には遊ぶものがほとんどなく、粘土を掘り出して遊ぶようになりました。当時は粘土で造形するのではなく、池を作り、メダカやカニを入れて楽しんでいました。この経験が、私が粘土に触れるきっかけとなりました。

昭和 41 年 (1963 年)、27 歳のときに結婚を機に石岡市大和町へ移り住み、家の工房で焼き物を始めました。この頃、彫刻や大学で学んだ絵画作品の制作に取り組んでいましたが、経年による退色が生じる絵画よりも、「不変性」の高い焼き物に魅了され、作陶に打ち込むようになりました。

より「不変性」の高い、唯一無二の焼き物を作りたいと考えていた中で、ビスマスの人工結晶を目にしたことが大きな転機となりました。それを見た瞬間、焼き物に金属を付着させた新たな表現を生み出したいと強く思うようになりました。



作陶においては、さまざまな試行錯誤と苦勞を重ねてきました。成型や焼成だけでなく、粘土の水ひ (原土を水でかき混ぜ、不純物を取り除く作業) に必要な装置やその他の機械を動かすための発電機など、研究機関から譲り受けた廃材を利用して自作しています。これは、幼少期から培

てきた電気・科学への興味とものづくりへの探求心が一つとなり、私の唯一無二の自己実現へとつながったのです。

●千代田焼について教えてください

昭和 54 年 (1979)、千代田村に窯業施設である「特産民芸品加工展示施設 (第 1 常陸野公園内)」を設置していただいたのですが、それ以前より、地元の土だけを使った焼き物を始めるつもりで、複数の窯業専門家とコンタクトを取りながら資料作成を行っていました。当時、専門家からは、「信楽の土を 3 割程度配合しなければ焼き物にはならない」と意見を受けていましたが、備前焼の工法を応用することで千代田町の粘土でも焼き物はできるということが出来ると確信し、



「千代田焼」の研究開発を始めました。

多くの試行錯誤を経て、千代田の粘土を用いて約1,250℃まで焼成して作成された器である「千代田焼」は完成しました。「千代田焼」は、地元の工芸品として生産する構想があったことから、笛や太鼓、駒、皿、神輿、尺八などを多く試作しましたが、商品化までには至りませんでした。しかし、この時に開発した技法などは、今の「つくば焼」にも引き継がれる重要なものとなりました。

●作品や素材へのこだわりを教えてください。

私は、作品の色彩に対して強いこだわりを持っています。色とはすなわち光であり、その光を引き出すために、プラズマの力を活用して着色を行っています。

具体的には、真空容器の中で高電圧をかけ、さまざまな金属を高温でプラズマ化させて焼き物の表面に付着させています。この技法を『真空釜結晶化』と呼びます。プラズマによって形成された結晶の厚みは分子や原子単位にまで及び、顕微鏡での確認も困難なほど精密に調整することで、自由自在な色彩表現を可能にしています。これは、半導体技術を焼き物に応用した独自の手法です。



また、焼き物の素材にも強いこだわりを持っています。ソーダ長石やかすみがうら市横堀で採取されるアルミナを含んだ蛙目粘土（がいろめねんど）を用いています。この粘土は磁器粘土に近い性質を持ち、特に鉄分を含むことから、私はこれを『黒磁気粘土』と呼んでいます。この粘土を、約1,300℃の温度で焼成しています。普通の素焼きでは、溶岩になってしまう温度ですが、アルミナを含んだ粘土であれば、4,000～5,000℃まで熱しなければルビー（結晶鉱物）にならないため、その温度まで上げることが可能です。

●陶芸に対する芸術観や哲学的観念、また、つくば焼をとおりて伝えたいことを教えてください。



私は、あらゆる価値の中で最も重要なのは自己実現であると考えています。人間には寿命があり、その限られた時間の中で自己実現こそが最終的な目標となるべきものです。

どれだけお金を持っても、それが自己実現に直結するわけで



はありません。自己実現のためには、私は「不変性」と「地域性」が不可欠な要素であると考えています。

まず「不変性」について、私は、粘土を用いた焼き物こそが、自己実現に最適な唯一無二の表現方法であると確信しています。高温で焼成された焼き物は非常に高い耐久性を持ち、さらにプラズマの結晶を塗布することで、より高度な永久性を備えることができます。現在の「つくば焼」は、この結晶化の形態を活かし、不変性を楽しむことができる点に大きな魅力があると考えています。焼き物を桐箱に収め、室内で楽しむことも一つの方法ですが、私はむしろ、重厚感のある大きな作品を制作し、それらを野仏のように屋外に放置して鑑賞することが生きがいになりつつあります。

次に、「地域性」について。人が「地域性」のある場所に生まれ、そこで生きることは、最も幸福なことであると私は考えています。反対に、地域性を持たない場所に生まれることは不幸であると言えるかもしれません。

ここには筑波山があり、それ自体が「地域性」を象徴しています。また、霞ヶ浦という湖もこの地の「地域性」を形成する要素の一つです。そして、その土地で採れる粘土を使って焼き物を作ることも、「地域性」を反映した創作活動の一環と言えます。

このように、「地域性」を突き詰めていくことで、誰にも否定されることのない唯一無二の作品が生まれると信じています。これからの「つくば焼」は、観る人にこういった思いを伝えられるような焼き物にしていきたいと考えています。



かすみがうら市湖山の匠とは

かすみがうら市では、令和5年度より、地域文化の振興を進め、市民の潤いのある生活の実現に寄与することを目的として、本市にゆかりのある芸術等の分野において活動し、その顕著な実績が認められる方を内外に広くその存在を発信すると共に、その活動や技術を支援する制度を新設いたしました。

かすみがうら市湖山の匠

令和7（2025）年4月 発行

かすみがうら市教育委員会事務局生涯学習課

〒315-0075 かすみがうら市中志筑 2112（千代田コミュニティセンター内）

tel : 0299-57-1073

mail : syakyo@city.kasumigaura.lg.jp

<https://www.city.kasumigaura.lg.jp/page/dir003348.html>



湖山の匠